

幼児の言い誤りから何が言えるのか (1)

— ダイアリー・データにみる心理言語学の課題 —

寺 尾 康

1. 自然発話データ

言語獲得研究において、幼児が行った自然発話を記録したデータは、近年その重要性が再認識されつつある。これは、言語はどのような過程を経て獲得されるのかを問う「発達的な課題」においてはもちろん、刺激の貧困と仮定される状況下で言語獲得はなぜ可能なのかを問う「論理的な問題」において特にあてはまるように思われる。一例をあげれば、主語落としパラメーターについて、最初に主語落としがデフォルト値と提案された研究だけでなく、それを見直すべきではないかという研究でも自然発話データが無視できない役割を果たしている。(Hyams 1986, Valian 1991) さらに最近では、より根本的な問いかけとして、子ども達に手にはいる一次言語資料は、実は「貧困」と呼べないのではないか、つまり、頻度が低い資料であっても何年間かの間積み重なっていけば「豊かな」資料になり得るのではないかと、という検証が自然発話データに基づいて始まったことも注目される。(小林・佐々木 1997)

幼児の自然発話データの収集方法は次の二つがよく知られている。一つは、1日、あるいは1週間のうち決めた時間内の子どもの発話を定期的に録音(録画の場合もある)していくものである。この方法は信頼できるデータが大量に、かつ発達の実時間に沿って収集できる点で優れている。McDaniel, et al. (1996) によれば、収録の場所や子どもたちの家庭環境に注意を払いつつ、複数の子どもの追いかけるのが理想とされる。もう一つの方法は、子どもの身の回りにいる観察者が研究課題に関連すると思われる子どもの発話を、それに遭遇するごとにメモをし、日誌(ダイアリー)形式でデータを積み上げてゆくという方法である。この方法は、聞き手としての観察者の側の問題(聞き間違い、研究課題に左右されて偏った解釈を行う、等)を考慮に入れなければならない、量的にも不足しがちであるうえに不定期的に採取されるデータなので発達の時

間軸に沿ってもいない、という欠点を持つ。そのため定量的な分析には不向きで時代的にも前者の方法にくらべて遅れていると言わざるを得ない。ただこうした点を補って余りある長所をあげるとすれば、それは課題に直結した資料を狙い打ちで集めることができるという点であろう。たとえば、研究者がある特定の言語現象 X に関心を持っていて、かつ自然場面では子どもの X の発話は 1 時間に 1 回だとしよう。この場合前者の定期的な収集では 1 日に 1 例の発話しか集めることができない。一方、ダイアリー・データでは、子どもに接していた時間数に比例した数の実例を集めることが可能になる。ここで注意すべきは、生起頻度の低い言語現象がそのまま周辺的な証拠となるとは限らないことである。その証拠自体が示唆に富むものである場合には、低い頻度で生じる実例を議論を行える数になるまで専門家が辛抱強く収集することで言語運用の理論やモデルの検証に十分貢献できると考えられる。

そのような特徴を持つ証拠の有力な候補として本論では言い誤り (speech error) に注目したい。すでに成人の発話モデル構築や第二言語習得研究の領域では、話者が無意識の内に発する誤りは、決してランダムに起こるのではなく、意識によるコントロールの及ばないところの中での言語に関する操作や表示を伝えてくれる規則性を持つ証拠として、正常な発話と同等かそれ以上の情報価値を有することが広く認められている。(Fromkin 1973, Rap and Goldrick 2000, Dulay, Burt, and Krashen 1982) ところが、今回とりあげる幼児の言い誤りにはこれに加わる形で興味深い情報が含まれているのではないかと予想される。というのは、幼児の誤りには、その子どもがそれまでに獲得された知識の使用の誤作動によって生じたという成人と同じタイプの誤りに加えて、獲得中の言語知識にアクセスするためのいわば試行錯誤の過程を反映した誤りが含まれている可能性があるからである。本論ではこの予想のもとに、ダイアリー・データから得られた実例を音韻論的な誤りを中心に分析し、その結果の持つ言語獲得理論への意味合い、および今後の研究への課題を明らかにすることを目的としたい。

2. 発話記録

本論の資料として用いられる発話記録は、筆者が二人の子どもの自然発話をその発話が行われたあとすみやかに書き取ったものを集めたダイアリー・データから言い誤りと認められる実例をぬきだしたものである。言い誤りの定義は、

『健常な言語能力を持つ話者が、故意にはなく行った意図から逸脱した発話を指す。これに、読み誤り、意図の変更、ためらい、吃音、ごく打ち解けた場面での不正確な発音は含めない。』(Stemberger1985, 寺尾 1992) という成人の言い誤り研究で用いられているものに加え、後述するように言葉の産出と理解にずれが生じることがある幼児の言い誤りの特徴を考へて、『発話者が気づいていない逸脱であってもそれが故意の発話でなければ誤りとして数える』という項目を追加して観察と記述にあたった。また、調音器官の未発達に起因すると考えられているいわゆる幼児発音(岩淵 他 1968、永渕 1985、伊藤 1990)は直接の分析対象からははずされている。被観察者の子どもたちは、T児が平成4年1月30日生まれの男児、Y児が平成8年4月16日生まれの女児である。二人とも日本語のモノリンガル話者で海外在住経験はない。

記述にはカタカナ表記が用いられた。実際には4年の年齢差がある二人であるが、左端に記された年齢に従って発話を並べたので比較がしやすくなっている。発話時の状況は()内にまとめられている。発話者は「父」や「母」のように特に断っていない場合はすべて被観察者本人のものである。データは言い誤りが生じた言語的な単位に基づいて音韻的(モーラや分節音といった音韻論的な単位、およびアクセントの誤り)、形態的(語の活用や派生に係わる誤りが中心)、文法的(助詞の誤りや文法的な要因によると思われる語彙の誤りが中心)、意味・語彙的(意味的な要因が関与していると思われる語彙の誤り、命名の誤りが中心)、その他(認知的、語用論的な要因が関与していると思われる誤り)の5つのグループに分類された。本論では音韻的誤りを中心に取り上げる。データは付録に掲げておくので参照されたい。その他の4グループの誤りについては機会を改めて紹介、分析を行いたい。

3. 幼児の言い誤りから言えること

3.1 音韻的誤り

・文脈的誤りと非文脈的誤り

音韻レベルの誤りは、次の3タイプへの分類が可能である。まず、(1)のようにある分節音が別の分節音にとって代わられたもの。これを代用型と呼ぼう。もう1つは(2)のように、同じ代用型であっても、誤りとして侵入してきた要素が文脈内にある誤りで、(2)では4モーラ後に現れるはずの「ス」が先取

りされて促音「ッ」の位置に代用されている。これを文脈的代用型と呼ぶ。最後に(3)は2つの音韻的要素の位置がそっくり入れ換わっている。この誤りは音位転換と呼ばれる。

- (1) a. アカイシータイ (赤いへいたい:Y 1.11)
- b. シャボンバナ (シャボン玉:Y 3.6)
- (2) a. ジェストコースターノラナイヨネ (ジェットコースター:T 3.11)
- (3) a. エベレーター (エレベーター: Y 3.5)
- b. ツマカシ (つま先: T 2.3)
- c. バシフノトコロ (芝生のところ T: 3.3)

(1) と (2) の間には注意すべき境界線があるように思われる。(1)はその要素の調音に関わる音声的な要因が働いていると考えられるのに対し、(2)は調音部門に送られる前に音節化やスロットの準備を行う音韻的符号化(phonological encoding)の過程を反映していると考えられるからである。(1b)が同化によるものと解釈されること、(2)では非自立モーラが自立モーラと関連している点に注目されたい。モーラという単位が発話にあたって実在性を持った単位として振る舞っていることを窺わせて興味深い。また、「ジェット…」と調音しようとしている時にすでに「コースター」の符号化が行われていた証拠ともとれるので、幼児の音韻的符号化が一度に処理できる射程がどのくらいかを知る手がかりにもなる。ただし、(2)タイプでは、どの要素が誤りを引き起こした「犯人」であるのかを決める機械的な手順がないことに加えて、頻度がそう高くないという指摘もある。(寺尾・村田 1999)そこで、音韻表示と音声表示を知る手がかりとして、誤りとその原因となった要素が明らかである(3)の交換型の誤りに注目してみたい。

・音位転換型の誤りの環境

このタイプの誤りは定義上、誤りとその源とを容易に知ることができる。まず、どれくらい離れたところのどのような音韻単位が交換されたのかをみてみよう。(3b)は子音を、(3c)はモーラを単位としていると解釈されるが、最も多いのは(3a)のように、共通の母音を持つために子音の誤りなのか、モーラの誤りなのかがあいまいである、という単位である。また、交換された要素間の距離はゼロ、つまり隣接するモーラ間で起こっている例が最も多く、せいぜ

い離れたとしても間には非自立モーラ1つのみが介在するという隣接する音節間で起こっている。典型的な環境は「隣接する、共通の母音を持つモーラ間で子音あるいはモーラが交換される」ということになる。これは、100例以上の実例を集めて行われた先行研究の分析結果とも一致する。(寺尾1993、寺尾・村田1999) この結果からは、幼児の音韻的符号化が一度に行える処理のスペンはすぐ隣の音節までという小さいものではないか、という予想ができる。この予想が正しいとして、今後2つの課題が考えられる。1つは交換された要素そのものの特徴を調べる必要があることである。もし、交換された2音が弁別素性の違いが少ない、類似性の高い音同士であるなら、音韻的な表示から音声的な表示を作る段階で類似性が引き金になって入れられるべきスロットが間違えられてしまい、幼児は過った音韻表示を「正確に」音声表示に写しかえて、結果として言い誤りをしていることになる。もう1つの観点は、寺尾・村田(1999)が提案する2モーラ連続の調音可能性の検討である。これは、隣接したモーラ間で起こりやすいという環境に注目して、1音ずつの特徴をみるのではなく、2モーラを1つのまとまりとしてその言いやすさをみるものである。たとえば、(3a)では、/soto/と/toso/はどちらが言いやすく、自然かを問うことになる。幼児は調音可能性の低い連続から高い連続へと誤るという仮説をたて、寺尾・村田(1999)はその実験的な検証を試み、/rebe/ (誤り、つまり自然で言いやすい組み合わせ)の最初のモーラは/bere/ (誤る前の正しい連続、不自然で言いにくいと予想される)の最初のモーラよりも早く調音されていることを確認した。もしこの仮説が正しいければ、幼児は正しい音韻表示を持っていても、調音実行という音声表示の最終段階でミスをするために言い誤りを起こすという説明になる。また、音韻ループの形をとって自らのフィードバックを聞いて音韻表示を形成する際に、調音が自然なために誤った入力をしてしまい、そのまま定着してしまうという可能性も捨てきれない。このタイプの誤りは訂正されてもくり返される傾向にあり、方言レベルでは「からだ」を「かだら」と成人も言うものがあることを考えあわせてもこの推測は興味深い。

・撥音挿入とフット形成

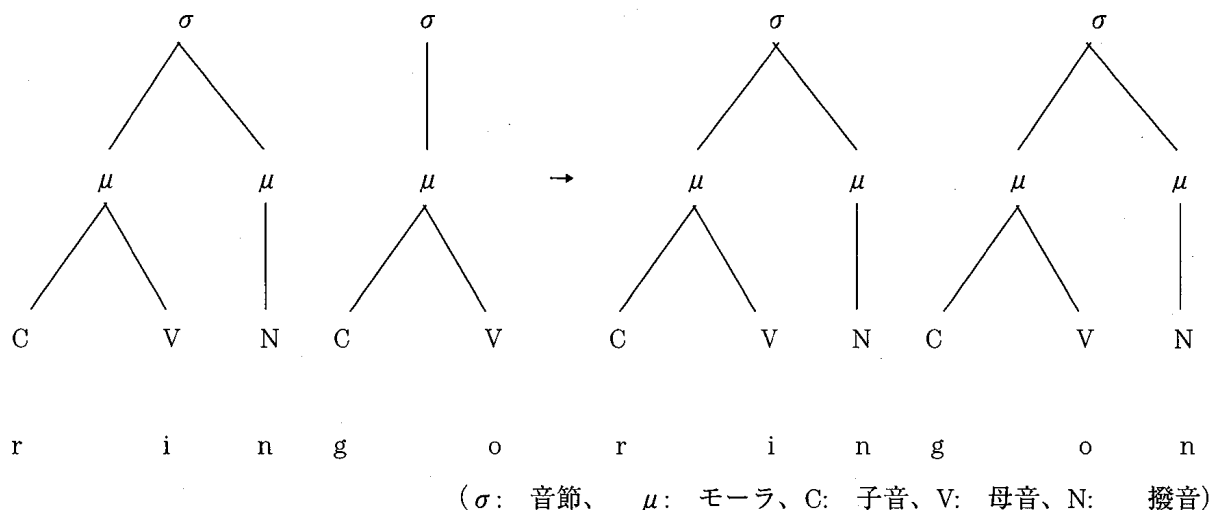
幼児の音韻的な誤りの一般的な傾向としてこれまでの研究では、ターゲットの語から音韻要素が脱落して簡略化されるか、ある要素の代わりに別の要素が代用されるものが多く、新たな要素が加わって、もともとの語が長くなること

は比較的少ないとされてきた。ところが、Y児の記録を見ていると、2.0歳から3.8歳まで長期間にわたって(4)のような、語が長くなる誤りが特定の環境で現れていることに気づく。

- (4) a. アンヨン (あんよ Y:2.0)
 b. オレンジジュース (オレンジジュース Y:2.2)
 c. コレハキカンチャン (機関車 Y:3.1)

あえて一般化を試みるなら、1つの音韻語の中で、右から2つ目の音節が撥音を含む重音節(CVN)で最右端の音節が軽音節(CV)である場合、最右端の軽音節に撥音が付加されて連続する重音節が形成されるということなる。

図 1 撥音が付加されて重音節が形成される構造



しりとり遊びを応用した研究では、例えば「もん」で終わる語を子どもに示すと、「も」で始まる語を答える傾向があることから、3歳を過ぎても重音節の子音部分はモーラ化の過渡期にある、という報告がある。(窪菌 1993) 1音節としてのCVX (Xは非自立モーラ部分)は早くから獲得されるものの、X部分のモーラ化は発達的には遅れるという提案であるが、今回の事例では、全く同じ重音節を複製している(例:「キカンカン」)わけではないので、X部分にあたる撥音/Nは2.0歳から他の音節に付与しうる独立の要素としての地位を持っているように見える。

ここで、重音節連続が産出される背景について考えてみたい。日本語では2モーラが1フットを形成し、2モーラ+2モーラの2フット構造はリズムック

で安定したまとまりを成すという報告が様々な言語現象を証拠に行われている。たとえば、ニックネーム（「まさおくん」が「まー+くん）、複合語縮約（「エアコンディショナー」が「エア+コン」）、という日常的な現象から（窪 1995）、伝導失語症患者の誤り音の付加位置（「カガミ」を「カガラミ」、「キュウス」を「キュウブス」のように2モーラが終わったところで1モーラを付加して全体として2モーラ+2モーラにする）まで幅広い証拠が集められている。（寺尾 1999）その中で本事例と関連が大きいと思われるのは、幼児語の中に重音節+重音節の構造を持つものが多いことである。たとえば、「パイパイ」や「ポンポン」は初語発話前から聞かされる音連続であろう。Y児がリズムミックで安定したまとまりを求めて撥音を付加する動機づけは入力となる周囲の発話資料の中にもみられるように思われる。

・子どもは入力のどの音韻単位を聞くのか

前節でふれた、周囲からの言語的な入力に関して言えば、たった1例ではあるが示唆に富む事例として紹介しておきたいのは、Y児3.8歳の時の以下のやりとりである。

(5) 父「あれは ふぐ」(鼻濁音で)

「フム」

父「ふぐ」(鼻濁音ではなく)

「フグ」

ふぐの噴水を指さしてあれは何か、という問に対して答えている場面である。鼻濁音を含む方言話者である父親が鼻濁音で「ふぐ」というと「フム」復唱し、鼻濁音を用いずに「ふぐ」と教えると即座に正しい形である「フグ」と復唱している。/g/音と/m/音は調音点、調音方法、有声性も異なるが、Y児は鼻音性だけは聞き取って復唱している。この事例は、いわば「お手本」としての周囲の発話を幼児は素性の単位まで分析しながら聞き取っている可能性を示唆しているといえる。

・複合語へのアクセント付与について

いわゆる共通語を含む多くの方言では、語アクセントは単語ごとに決まっており、恣意性が高いのだが、それらの単語が組み合わせられて複合名詞を作る

場合はそのアクセントは後部要素のアクセント型によって規則的に決まってくるので完成形は予想が可能となる。以下、窪菌・白勢（2000）に従って複合語アクセントが決められ方をみていこう；

- (6) a. 後部要素にアクセント核があり、それが最右端にないとき、
アクセントは維持される（^印はアクセント核を示す）
例：ペ[^]ルシャ + ネ[^]コ → ペルシャネ[^]コ
- b. 後部要素にアクセント核があり、それが最右端の音節中にあるとき、
アクセントは最も右端のフット（2モーラで1フット）にくる
例：イ[^]ンド + ズ[^]ー → インド[^]ズー
- c. 後部要素にアクセント核があり、それが最右端の軽音節にあるとき、
アクセントは最も右端のフットにくる
例：アバレ + ウマ[^] → アバレ[^]ウマ
- d. 後部要素にアクセント核がないとき、アクセントは最も右端のフットにくる
例：カ[^]ブト + ムシ → カブト[^]ムシ
- e. 「山」のような一部の例外的な要素が来る場合。「山」は平板化する。
例：アタゴ + ヤマ[^] → アタゴヤマ

幼児はなんらかの形で正解をみつけていかなければならないのだが、これまでは（6）の各項目を規則と捉え、言語獲得とはこうした規則を獲得することだと考えるのが支配的であった。ところが、近年、急速に研究が進み、従来の規則と派生の考え方にとって代わろうとしているのが最適性理論（Optimality Theory: OT）の制約に基づく考え方である。OTは、普遍文法は言語に関する制約の集合からなり、個別言語間の相違は制約のランキングの違いに帰されると仮定する。制約は大別して2種類の制約があり、1つは入力と出力を同一に保とうとする照合性（Faithfulness）制約、もう1つは有標なものを排除せよ、という有標性（Markedness）制約である。個別の現象でみると、出力となるのは「破ってはいけない」順にランク付けされている制約群の内、最も低い（いわば罪の軽い）制約を破っている候補が最適な出力の候補ということになる。

具体例をみてみよう。窪藪・白勢（2000）では、共通語複合語アクセントの付与は、（7）に示す制約がこの順で配列されていると仮定し、（表1参照）最も低位の制約を破るパターンが最適なものとされる、と記述されている。表1では「ペルシャネ^コ」が最適の出力ということになる。

（7）

Nonfinality-syllable 制約 アクセント核を持つシラブルは語末に現れない

Parse-accent 制約 複合語の第二要素のアクセントは保持される

Nonfinality-foot 制約 アクセント核を持つフットは語末に現れない

Edgemostness 制約 アクセントは最大限語の端に現れる

表1 複合語アクセントの出力例（窪藪・白勢（2000）から）

ペ^ルシャ + ネ^コ	Nonfin (syll)	Parse-Ac	Nonfin (ft)	Edgemost
→ a. ペルシャ + ネ^コ			*	1
b. ペルシャ^ + ネコ		*!		2
c. ペル^シャ + ネコ		*!		3
d. ペルシャ + ネコ	*!			

表の中で*印は制約違反を、*!印は致命的な制約違反を、→は最適な出力を、Edgemostのところの数字は右端からの音節の数を示す。ここで、OTでは言語獲得はどのように捉えられるかをみると、母語に触れることで、生得的に決められていた制約のランキングが変化していくことであると考えられている。最も無標な出力しか出さない文法から複雑な文法への移行が言語獲得なのである。OTでは幼児の言い誤りの一部は、このランキングの移行が不完全であるために生じると仮定されている。では、この移行過程で、幼児が試行錯誤しているかにみえる誤りは観察できるのだろうか。この点に関連して興味深いのは、本資料中の次の実例である。

（8） a. ソノガリバーオウコクッテドコニアルノ（T: 5.6）

b. テレビトウキョーッテジュウニチャン？（T: 5.9）

c. オンセンタマゴ（Y: 4.6）

両児にとって「テレビ東京」、「ガリバー王国」「温泉たまご」はそう親密度の

高い単語ではなく、おそらくこの時が初めて接する機会だったのだが、それぞれ、2語が1語になる前のアクセントを保って「テ^ハレビ（頭高） トウキョー（平板）」、「ガ^ハリバー（頭高） オ^ハウコク（頭高）」「オンセン（平板） たま^ハご（中高）」と発話された。これをOT的に分析すると、どうなるのだろうか。

まず、考えられるのは、「入力と出力を同じ形に保て」という普遍的な制約である Faithfulness 制約が強く残っているのでそのままの形が出てくるという見方である。ここで注意すべきは、複合語アクセントについての制約は複合語が幼児にはっきり認識された後に現れる後天的な制約であることである。統語的な側面を記したダイアリー・データからの以下の例をみてみよう。

(9) (道に落ちていた太い犬のフンをみて)

「ア、イモムシウンチ」(Y: 4.3 複合語アクセントで)

父「ねえ、うんちいもむしはどういうの」

「チャイロイノ」

父「ねえ、うんちいもむしはうんち？いもむし？」

「ウンチ」

父「じゃあいもむしうんちは？」

「ウンチ」

(9) を見る限り、主要部がどちらかまで理解して複合語を使用していると即断することには慎重になった方がよいように思われる。語形成の規則によるよりも、よりインパクトが強い方の要素に引かれて意味解釈をするという可能性も捨てきれない。「ウンチイモムシ」と「イモムシウンチ」をどちらも「ウンチ」だと解釈しているところをみると、「ウンチイモムシ」では複合語アクセントが適用されず、各語ごとのアクセントで2語の連続として発話されることがあるのではないかという予想も成り立ってしまうように思われる。Faithfulness 制約は普遍的なものではあるかもしれないが、それが生得的にセットされているとは考えにくい。分節音レベルを超えたアクセント付与における制約について再考の余地があるように思われる。

次に個別の制約ランキングにしたがって記述してみると、出力例は以下のようになる。

表2 T児の「テレビ トウキョー」の出力例

テ^レビ+ トウキョー	Nonfin (syll)	Parse-Ac	Nonfin (ft)	Edgemost
→ a. テレビ+ ト^ウキョー				3
b. テ^レビ+ トウキョー				5 !

この分析が正しいとすると、T児の誤った発話が Edgemost 制約をより大きく破っているので選ばれず、正しい形が出力となる。もしこのような誤りが多くみられるなら窪菌・白勢の提案する制約のランキングで、Edgemost の制約が最下位に来るのは正しいという証拠になるかもしれない。ただ、術語解釈のレベルで異なった出力も可能になることにも注意されたい。窪菌・白勢では、「第二要素にあるアクセントを保持せよ」という制約として Parse-Accent が提案されている。「トウキョー」にはもともとアクセントが「ない」ので複合語の正しい形の第二要素にアクセントが来ても違反にはならないというのだが、普遍的な Faithfulness 制約では「入力と出力を常に同じに保て」という強い解釈が与えられることもある。そうすると、出力例は表3のようになり、正しい形の方がより上位の制約を破ることになり、T児的な誤りの方が最適となってしまふ。回避のためには、Faithfulness 制約と Parse-Ac 制約との関連を理論的に明らかにする必要があるように思われる。

表3 T児「テ^レビトウキョー」の出力例
(Parse-Ac 制約の解釈を変えた場合)

テ^レビ+ トウキョー	Nonfin (syll)	Parse-Ac	Nonfin (ft)	Edgemost
a. テレビ+ ト^ウキョー		* !		3
→ b. テ^レビ+ トウキョー				5

いずれの場合においても、OT 理論全体の問題として関わってくると思われるのは制約のランキングの変化をもたらす要因は何かを明らかにすることである。その候補として調音や聴音のし易さ、という要因があげられているが、いわゆる超分節音的要素であるアクセントに強く関わってくるとは考えにくいように思われる。では、単なる周囲の発話のものまねでランキングが調整される

のだろうか。この考え方が正しいにしても、すぐに次の課題につきあたってしまう。たとえば、どのくらいの頻度でどのような性質の試行を重ねると正解に達するのか、は難しい問題である。ダイアリー・データの観察だけでは、(10)のように正解の後に誤りが現れたりするので正確に捉えることは難しい。

(10) a. オトウサン、タイイクカンドミジョンヤロウ (Y: 4.3)

(「体育館ドミノ」、TV番組のようなセット内の大がかりなドミノ倒しのこと。正しい複合語アクセントで発話。)

b. オンセンタマゴ (Y: 4.6) (8 c 再掲)

ただ、最初は誤答を出しながら、徐々に正解を出すパターンを学習していった、安定状態に達する様子はニューラルネット・モデルのシミュレーションを連想させる。複合語アクセントの習得に関していえば、学習すべきターゲットは前述の5パターンである。窪菌・白勢の行った実験に習熟のためのセッションをとり入れることで、どのパターンから獲得されるのか、パターン間で学習にあたって相互作用はあるのか、といった課題が検証できるかもしれない。一方、ものまね仮説が正しくないとするるとどのような問題が出てくるのだろうか。単なるものまねではないとなると生得的に何が決まっているのかを明らかにしなければならない。OTでは、自分の接している母語が制約を守っているのか違反しているのかを子どもたちが判断する際に、全ての候補をチェックする必要をなくすためにあらかじめ候補が限定されている、という意味で制約の生得性が主張されている。ただ、この点に関しては開発の途上で、具体的な言語現象と結びつくほどには内容が明らかでないように思われる。

4. 音韻的言い誤りについて —結語にかえて—

本論ではダイアリー・データにみられる幼児の音韻的言い誤りから何が言えるのかを中心に心理言語学が取り組むべき課題のいくつかを紹介してきた。たとえば、不定期的で量的にも十分ではないデータであったとしても、理論との接点を探りながらより深く解釈しようと試みることで、単なる事例報告は貴重な手がかりになる可能性を秘めているのである。Pinker (1994) は動詞の活用などにみられる幼児の形態的な誤りにふれて、そもそも子どもは間違いをしないし、したとしてもその多くは過度の一般化で説明できる、と述べている。そう

した誤りに比べると、音韻的誤りはより言語獲得の「現場」に近い、より多くの要因によって引き起こされているようにみえる。それらを解き明かしていくために、今後、様々な幼児の自然発話データが集められることを願って結びとしたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、草稿の段階から九州工業大学の深澤はるか講師に有益なコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。

付記

本研究の一部は平成12年度文部省科学研究費補助金特定領域研究(A)「心の発達」(代表桐谷滋 班代表窪菌晴夫)、同研究成果公開促進費(データベース)「JCHATによる言語習得研究のための日本語発話資料」(代表寺尾康)、および静岡県立大学平成12年度特別研究の補助を受けて行われた。

参考文献

- Dulay, H., Burt, M., and Krashen, S. (1982) *Language Two*, Oxford University Press.
- Fromkin, V.A. (ed.) (1973) *Speech Errors as Linguistic Evidence*, Mouton.
- 伊藤克敏 (1990) 『こどものことば』、頸草書房。
- 岩淵悦太郎、波多野完治、内藤寿七郎、切替一郎、時実利彦 (1968) 『ことばの誕生』、日本放送出版協会。窪菌晴夫 (1993) 「子供のしりとりとモーラの獲得」 原口庄輔 (編) 『日本語モーラと音節構造に関する総合的研究(2)』、重点領域研究「日本語音声」成果報告書。
- _____ (1995) 『語形成と音韻構造』、くろしお出版。
- 窪菌晴夫・白勢彩子 (2000) 「複合語アクセント規則の獲得：理論とデータ」、特定領域研究(A)「心の発達」ニューズレター No.8.
- 小林春美・佐々木正人 (1997) 『子どもたちの言語獲得』、大修館。
- Hyams, N. (1986) *Language Acquisition and the Theory of Parameters*. Dordrecht: Reidel.
- McDaniel, D., McKee, C., and Cairns, H.S. (1996) *Methods for Accessing*

- Children's Syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 永渕正昭 (1985) 『言語障害概説』、大修館。
- Pinker, S. (1994) *The Language Instinct*. NY: William Morrow.
- Rap, B. and Goldrick, M. (2000) "Discreteness and Interactivity in Spoken Word Production", *Psychological Review*, Vol. 107, No. 3, 460-499.
- Prince, A and Smolensky, P. (1993) *Optimality Theory: Constraint interaction in generative grammar*. Ms., Rutgers University.
- Stemberger, J.P. (1985) *The Lexicon in a Model of Language Production*, NY.: Garland.
- 寺尾康 (1992) 「文産出研究からみた音節・モーラ」、原口庄輔 (編) 『日本語モーラと音節構造に関する総合的研究 (1)』、重点領域研究「日本語音声」成果報告書。
- _____ (1993) 「音韻的交換型の言い誤りの特徴について -成人と幼児の誤りの比較を含めて-」、原口庄輔 (編) 『日本語モーラと音節構造に関する総合的研究 (2)』、重点領域研究「日本語音声」成果報告書。
- _____ (1999) 「音韻性錯語と健常者の言い誤りとの比較分析」、『失語症研究』、19 卷 3 号、193-198。
- 寺尾康・村田忠男 (1999) 「2 モーラ連続環境における調音可能性とその言語産出モデルへの意味合い」、『音韻研究』第 2 号、109-116、開拓社。
- Tesar, B and Smolensky, P. (2000) *Learnability in Optimality Theory*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 友定賢治 (1997) 『全国幼児語辞典』、東京堂出版。
- Valian, V. (1991) Syntactic subjects in the early speech of American and Italian children. *Cognition* 40, 231-81.

付録 ダイアリー・データ
音韻的

年齢	T 児 T児：平成4年1月30日生まれ 男	Y 児 Y児：平成8年4月16日生まれ 女
1. 6	父「たけし、かっぱはかっぱ？」 「パッカ」 父「これはコップ」 「ポック」	「シンシャン フトツイタ」(しんちゃん二人いた)
1. 9		「ンミ」(海) 「エー マゴッチョ」(まじよっこ) (ヒマラヤの山を見て) 「マナ (LH)」 父「やま」 「マナ」 父「やま」 「ママ」 父「やま」 「マナ」
1. 11		(バナナを見て) 「バダ」 父「バナナ」 「バダナ」 (蛸をみて)

年齢	T 児	Y 児
		父「あ、たこだ」 「カト」 父「たこ」 「カト」 (クロネコヤマトのマークを見て) 「エコ」 (赤い兵隊のテレビを見て) 「ア、アカイシータイ」 (足の裏を見せながら) 「アンヨン」 撥音つけて2音節
2.0	(新幹線の窓の外を見て) 「オトソ」(お外) 父「お墓に行くんでしょ」 「オカハ」(お墓)	(高い高いをする) 「カターイ」
2.1		「アケテバー」(開けてってば) 父「ゆき、おやま行くか」 「オナマ イク オウチ イカナイ ア トエ」(お山行く。お家行かない。後で) (山に着く) 「オー、オナマ」 父「おやまだよね」 「オナマヤ、オナマイク」 父「やま」 「ヤマ」
2.2		「デンキン イヤ」(電気) 「オレンジジュース」

年齢	T 児	Y 児
2.3	父「かかととは？」 「カカト」 父「つまさきは？」 「ツマカシ」(最後の「シ」はやや口蓋化) 4回繰り返す (その3分後) 父「つまさき」 「ツマカシ」 父「つまさき」(LLHLのアクセントで「さ」を強調) 「ツマサキ」(「サ」はやや口蓋化)	「ポックポー」(ポップコーン)
2.4	「オサカマランチ」(お子さまランチ)	父「ゆき、これなに」 「クンチャマ」(くまちゃん) 「デンワン」(電話)
3.1	父「車が網にぶつかったんだね」 「クルマガアニミブツカッタノカ」	「ハイトウジャングル」(かいとうジャンヌ) 「カレパンダン」(たれパンダ) 「コレハキカンシャン」(機関車)
3.2	「ロウコス ロウコス」(ろうそく) (その直後) 父「ケーキの上に立てるのは何？」 「ロウソク」	
3.3	「シバフノトコロヲトオツテカエルカ」 父「しばふでしょ」 「シバフノトコロ」	父「あの黄色い花はなに」 「タンポボン」(たんぽぽ)

年齢	T 児	Y 児
3.5		<p>「デンワンヨ」(電話よ)</p> <p>「オトコノコトオンナコト」(女の子)</p> <p>「ウンパカン」(うんこパン (コロネのこと))</p> <p>「エベレーター」</p> <p>父「エレベーター」</p> <p>「エベレーター」</p>
3.6		<p>「シャボンバナ」順行同化?</p> <p>父「シャ、ボ、</p> <p>「ボ、ン、ダ、、マ」</p> <p>(途中から声を合わせる)</p> <p>「ピンゲーノポックポーン」(ポップコーン)</p> <p>「ココラクダサイ、(ゆっくり) コ、コ、ア」</p>
3.8		<p>父「あれは ふぐ」(鼻濁音で)</p> <p>「フム」</p> <p>父「ふぐ」(鼻濁音ではなく)</p> <p>「フグ」</p> <p>「ユキノダンゴン」(だんご)</p>
3.10		<p>父「ボクシングの試合の時」</p> <p>「ボシク」</p> <p>父「ボクシング」</p> <p>「ボシクン」</p> <p>「カンゴクサン」</p>

年齢	T 児	Y 児
3.11	「アンナ ジェストコースターノラナイヨネ」	父「かngoふさん」 「カンゴフ」 父「かngoふさん」 「カンゴクサン、アレムズカシイノ」
4.3		「オトウサン ドミジョンヤロウ」 父「ドミジョンじゃないの ドミノ」
4.5		「オトウサン ドミジョンヤロウ」 「オトウサン タイイクカンドミジョンヤロウ」 (複合語のアクセントで) 「モリシボリチャンガネ」 父「ねえ、ゆき、しほりちゃん? しおりちゃん?」 「シ、オ、リ、チャン」 父「しほりちゃんとしおりちゃんは違う?」 「チガウ」 母「タオルせんせいこっちの持っていきます?」 「タオルセンセイ オモシロイ」 (先生 (呼びかけ)、タオルもって行きます。なら普通。タオルセンセイは複合語に聞こえる)
4.6		アナ「おんせんた' まごです」 「オンセン' タマ' ゴ」
5.6	母「ガリバーお' うこく連れてってくれるって」 「ソノガ' リバーオ' ウコクッテドコニア ルノ」 母「ガリバーお' うこくでしょ」	父「ゆき、おんせんた' まご」 「オンセン' タマ' ゴ」

年齢	T 児	Y 児
5.8	<p>「ガ' リバーオウコク」</p> <p>「ボクハダンカイ、カイダンジャナイカラ」</p> <p>「オチバ (LHH) 」</p> <p>父「たけし、おちば (HLL) とおちば (LHH)、どっちが正しいと思う」</p> <p>「オチバ (HLL) カナ、ワカンナイ」</p>	
5.9	<p>「オカアサン、テ' レビ トオキヨオハ12 チャン？」</p>	